

The Journal Of Global Studies

ICHINOMIYA NISHI SHS 5th September 2017

国際理解コースって英語コース？

最近よく耳にするのは、

「国際理解コースって要するに英語をやるコースじゃないの？」

という質問です。

それに対しては、これまで皆さんにコースの紹介をしてきた中で何度も答えているわけなのですが、ここで再度ハッキリお答えしましょう。

「違います」

西高のHPを見てもらえばわかるように、「英語をコミュニケーションツールとして学習」しますが、2年では「文系の高いレベルの学習内容」、3年では「経済学部・法学部（政治）・総合政策学部など（外語系なども含む）への進学」が目標となっています。

「英語をコミュニケーションツールとして」使えるようになるのはなかなか大変なことなので、国際理解コースの英語の時間は文系普通コースよりも1時間余分にとってあり、内容も実際に英語を用いることに力点が置かれています。しかしそれがそのまま、英語を専門にするということに繋がるわけではなく、あくまでもそのようにして得た英語力の使い方は、学び手自身に任されています。

たとえ外国語学部に進学したとしても、専門は「英語」ではありません。県内のある大学の外国語学部英米学科のHPにはこのように書いてあります。

・英米学科は、よく英語「を」学ぶ学科だと思われるようですが、英語「で」英語圏について様々な角度から学ぶ場所なのです。

卒業論文のテーマには、

・英語圏のメディアにおける東日本大震災の描かれ方

・Buchí Emecheta 著“Second Class Citizen”の分析 — Female Identityの再構築

などが選ばれています。

逆に、一見外語系学部ほどは海外に縁のない印象がある名古屋大学経済学部には「グローバル人材育成プログラム」という科目があり、次のように紹介されています。

「グローバル人材育成プログラムは文字通りグローバル経済社会で活躍できる人材育成という目的を共有するトヨタ自動車、三井物産、三井住友銀行、新東工業をはじめとするグローバル企業12社の厚いご支援を得て2009年度に学部2年生を対象とした新科目としてスタートしました。企業の最前線で奮闘されている方々を毎週講師にお招きして生の体験やグローバル経営のやり方などを現場目線から分かりやすくご講義頂きます。学生のみなさんがそこで何らかの問題意識を持ってもらうことが狙いです。」

また、「英語を使う業種・職種は？」というアンケートをある出版社が行いました。一般的なイメージとしては「商社」「海外営業」「通訳者」などが思い浮かびますが、その結果は、なんと、**業種はメーカー（製造業、愛知県には一番多い業種）** **職種は技術職（理系です）**、ということになりました。（理系の人こそ実は英語、とはどこかで聞いた話です）国際理解コースで英語を勉強することが、そのまま将来英語を使う仕事に直結することはどうていありえません。

何がしたいか、もうわかってもらえましたか。国際理解コースではもちろん英語もやりません。しかし、英語ができることはこの先の世界では常識です。コースの特色は英語ではなく、「文系の高いレベルの学習内容」、Journalの4th issueで紹介したように、「幅広い教養」「課題解決能力」「コミュニケーション能力」を鍛えるため、より深く学び、より考える機会を提供することです。目標を持った人はもちろんですが、まだ自分が何をすればよいのかわかっていない人も、コースで学び深く考えることで逆に選択の幅が広がります。なんとなく大学を選び、雰囲気学部学科を選ぶのではなく、問題意識を持てば、その意識に応じた大学学部を自分から探しにいくことができるからです。

我々の身の周りから、遠く離れた場所にいたるまで、この世界は答えのない課題に満ちあふれています。答えのない問題に少しでも糸口を探すために、国際理解コースと一緒に学び考えていきませんか？